



(医)潤心会理事長(岩手県)

鈴木千枝子 ④

私は「歯医者」が大嫌いだった。昭和31年生まれ、父母は洋装店を経営し忙しかったので、学校から帰ると20円のおやつ代をもらって駄菓子屋に走る毎日だった。

薬のにおいがする場所だった。診療室と待合室はついたて一枚で区切られているだけで、順番を待っている「キーン、キーン」という恐ろしい音と共に、歯が焦げるにおいまで漂ってきた。院長はおじいさんの先生で、立った姿勢のままエンジンで歯をガリガリ削る。今思い出して

しかし実際は、奨学金の返済と何より無給は困るという親の意向で、盛岡の歯科医院に就職。いろいろな事情で一年後に分院長になり、その半年後には分院を買収取って開業医になってしまった。27歳だった。

気がつくとも開業から15年たった。ちょっと生活も楽になってきた時に、倉治ななえ先生の「子育て歯科」に出会い、歯科医師観が変わったのだ。

## 歯医者が嫌いだった

らいのお菓子をだらだらと食べていた。案の定、むし歯になったが、いとはカルピスを常飲していた乳歯が全て真っ黒だったので、子供心に「自分の方がまだまし」と思っていた。

も背筋が寒くなるような光景だった。そんな子供時代を送った私がひよんなことから歯科医師になった。その最大の理由は、自分のような不幸な子供を助けたいと思ったからで、すぐさま小児歯科医を目指した。

た時代（平成25年12歳児のむし歯の者の割合は44・6%）。私のような未熟者でも患者さんは来てくれて、削ってつめて、抜いて被せての繰り返しを毎日黙々とやっていた。子供が泣いて暴ればレストレーナーにくくり付けて、ガンガン治療していた。

「これでいいのか？私が行っているのは、あのおじいさん先生と同じなんじゃないか」……。時々湧き上がってくるそんな思いを封じ込めながら、開業時の借金返済のため、生活のために働いた。